

近年の科学技術の発展は、目覚ましいものがある。

私が、インプラントを始めた二十年前は、インプラント治療をしてインプラントのボディが顎の骨にしっかりと固定するには、おおよそ下顎は三か月、上顎は四か月かかった。さらに、その後噛めるようにするにはさらに一か月を要した。

しかし、近年のインプラント体の質的向上や、手術技術の向上もあって、現在では一般的には、術後二〜三か月で上部構造物が装着でき、当時の約半分の時間で快適に噛めるようになった。

今までお話ししてきたように、インプラント治療は咬む力やかみ合わせの回復、そして発音や、顔貌の回復など、今までの「入れ歯」では難しかった機能をしっかり取り戻すことができる素晴らしい治療法だ。



歯科医が語る現代版養生訓

ただ、技術は向上しても、自分の歯と決定的に違うことは、あくまでもインプラントは人工的に作った「道具」であるという点だ。

当然、メンテナンスを怠れば、いかに優れた歯科医によって、秀逸な手術が行われても、その予後は大きく左右される。一度自身の歯を失い、次は人工の歯を失うことにもつながる。

私が患者さんに「(インプラント)手術は成功です。ただ、治療はこれからです」と必ず申し上げるのも

術後のメンテナンスを怠ることの怖さを伝える一面もある。

自分の歯と、インプラントの大きさ異なる点は、自分の歯には根の周りにある「歯根膜」という歯を守る天然の防御組織があるが、インプラントには存在しない。したがって口腔内の細菌をコントロールしないとインプラントは、その周囲に炎症を起しやすいのだ。

歯を失う主な原因は、虫歯や歯周病であるが、これらは口の中の菌による菌性感染症である。

菌のケアを怠ったことで、自分の歯を失った時と同様、口の管理を怠れば、せつかく入れたインプラントの周囲にも感染(インプラント周囲炎)は起こってしまう。

一度、インプラント周囲に感染が起これば、その周りの骨は破壊されインプラントを支えられなくなる。また、咬み合せの悪習(歯ぎしり、くいしばり)により歯を失うこともある。

これらの患者さんに、インプラント治療を行うと懲りずに再び歯ぎしりが始まる。寝ている間に起こる歯ぎしりや

手術より大事なインプラント、定期治療

噛みしめは想像以上のパワーで歯やインプラントに負荷をかける。これが長く続けば、やはりそれを支えている周りの骨を壊す。

人は懲りない動物である。なかなか自分の生活習慣を変えられないことが多い。

一度失った部位に、もう一度インプラントという「歯」を獲得しても、悪しき生活習慣を変えないと再び「歯」を失うことになりかねない。歯を失った原因を、自らしっかりと理解し、末永く機能させるために

歯科衛生士や専門医による定期的なメンテナンスを受けることが大切だ。自分の歯も同じであるが、定期的な健診を受けている方は歯を失わなくなる。

私のクリニックでも、インプラント治療を受け、定期的(半年や一年に一回程度)に管理を受けている方は、三十年近く機能している方も多い。

顎関節症

ドライマウス

舌痛症

東京歯科大学
亀井 英志
Kamei Hidetsi

ストレスは

見える!

すべては「噛みしめ」が原因だった

気がつくとも歯を食いしばっている。心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書「すべては「噛みしめ」が原因だった」をお読みいただきたい。未病の原因をまとめた良書です。

亀井英志(かめいひでし)

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

